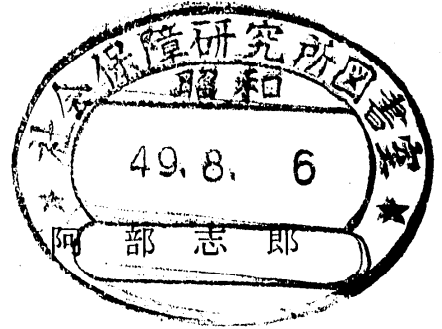




「不幸は沈黙している」と、シモーヌ・ヴェイユはいう。

不幸が沈黙するのは、訴えることのむなしさを知るからであろうか。「福祉」は不幸の沈黙を破るために芽生えた。不幸の克服をめざす福祉を、いかに日本で成熟させるかは大きな課題である。これは福祉を支える思想構造と密接な関係があるといえよう。

日本社会の基盤をなす「家」は、内側と対外倫理とを峻別する。義理人情の醇風美俗をかもし出し、問題の解決を家族内の相互扶助で図ろうとする。それには、当然のことに限度がある。家名断絶の恥を避けるため、背負いきれない重荷を持込む身内を、非情にも排除する。老人はオバ捨てに、娘は売られ、子供は捨子に、癪者は浮浪癪に、不良児は勘当に――。

福祉問題は、かくして、家族の外側に発生する。そこは、マックス・ウェーバーが〈無倫理〉ときめつける「赤の他人」の世界にほかならない。その問題は自己のものとはなりえない。福祉問題を「他人ごと」としてとらえるところに、第1の思想がある。

「富国強兵」の国家目標のうち、強兵の旗印は消えたが、経済成長に象徴される「富国」は、戦後もみごとに生きつづけている。普通児は「金の卵」と珍重されても、精薄児は「特殊」学級に、洩れた「福祉の子」は施設に送られる。生産力をもたぬばかりに。教育さえも経済に奉仕せねばならぬとは……。経済論理を包みこむ「人間の論理」は、未だ見出されないようである。「働かざるものは食うべからず」が、第2の思想である。

福祉の対応にも深淺がある。老人問題には、誰しも必然性をもつからか、売った恩が老後に返るのを願いながら、切実な関心を抱く。しかし、自分に可能性の及ばない心身障害児問題の理解は、第3の思想、すなわち、「今日は他人の身、明日はわが身」からは生まれない。

ヨーロッパの福祉は、決断と自主的選択にもとづくボランティアから出発した。不幸に苦悩するマイノリティになり代って、マジョリティに抵抗する精神が「価なくして受けたれば、価なくして与えよ」の無償の行動として表現されたのであろう。

日本の場合、「陰徳陽報」が強調され、善行にさえ秘かな報償の期待がはらまれていないか。「情けは人のためならず」を第4の思想と指摘しておこう。

働けない者は、経済社会の競争に生残れない。しかも、この「他人の身」の不幸は、報恩を伴わぬから全人格を傾けるに値しない。ゆえに、不幸はいつまでも沈黙せざるをえない。

「家族」から切捨てられた者は、「国家」＝「施設」へ。「家即国家」の短絡化の図式である。血のつながりによる「悲しき助け合い」から脱皮をとげ、「人間」と「コミュニティ」への信頼に根ざす「福祉」を、善意を美談とし、人と人を人格として平等に結びつける社会的契機をもたぬ日本の社会に、いかに受容すればよいのか。

われわれは、明日の福祉社会が胸奥に求めてやまない思想を、はたしてもっているのであろうか？ いわゆる「福祉の心」の位置づけは？ 不幸に挑む主体的努力〈ボランティアなエトス〉の国民的拡がりとは？ を改めて問い直さなければいけないと思う。

不幸の自然解消を待つ姿勢は、福祉的とはいえない。不幸とは何かを科学的に解明しつつも、「愛なくば科学は不毛」となる心的態度で、不幸そのものに深くかかわることが求められているのではあるまいか。福祉は、不幸を沈黙させぬために存在するのである。